

ブラジル&ペルーの旅

(1)

テレジーナ市



リオデジャネイロの美港



ブラジルはフルーツの宝庫

熊本～羽田～成田～ヒューストン～リオデジャネイロ～フォルタレザ～テレジーナと、

気の遠くなるような飛行時間は、合計してみると 30 時間以上にも上っていた。

しかし、リオデジャネイロで一泊した事が幸いしてか、目的地テレジーナ市に着いた時は、意外と元気であった。

それは、今日から始まる新しい人々との出会い、新しい体験への期待感のほうか、

疲労感より勝っていた結果であろうか。

南緯 5 度にある市だけあって、空港へ降り立った時の暑さはさすがであった。

でも、そこは熊本県人の私、これ位の暑さにはすぐ慣れる。また、湿度が低いので日陰の涼しさは熊本よりずっと気持ち良かった。

空港には、日系移民の中山氏と、リザンドロ チト小学校（西合志第一小学校と交流することにな

った現地の小学校)の教頭先生達の数人がお迎えに来てくださっていた。

15歳の時に移民された中山氏との挨拶は、もちろん日本式のお辞儀と握手だったが、

他のブラジル人の方達とは、これももちろん現地スタイルであった。

女性同士は、ハグ(抱き合うこと)に加えて、両方の頬と頬を交互にくっつける。

その度に、軽く口で「チュッ」「チュッ」と音を立てて、キスをしている真似をしていた。

これは、とてもラテン的である。アメリカやイギリスでは両方の頬を合わせる事は、あまり無かったように思う。

約400年間もポルトガル領土だった影響だろうか、ブラジルはポルトガルのラテン文化がすっかり融合してしまっているようだ。

さっそく「Obrigada!」(男性はobrigado 女性はobrigada、全てに男性語と女性語がある!)

と、覚えたてのポルトガル語で御礼を言って、テレジーナ市民との交流が始まった。

ブラジル&ペルーの旅

(2)

ブラジルの日系移民



日本を背負って活躍される中山氏



記念植樹も中山氏の御尽力

「ハルとナツ」... 昨年 NHK で放送された、このドラマの名前を覚えている人は多いだろう。

ブラジル移民をテーマにした 3 夜連続の特別ドラマで、移民の実態に迫った描写が印象的な、感動的なドラマであった。

来年は、1908 年に 781 名の人達が始めてブラジルに移民してから、ちょうど 100 周年にあたるそう
うだ。

現在、ブラジルに住む日系人は 150 万人以上で、戦前の 20 万人から比べると、飛躍的な伸びを示している。

熊本は、沖縄や福井と並んで移民の数ではトップ 3 にはいるそうだ。来年はたくさんの記念行事が、ブラジルと熊本間でも開催されると聞いている。

今回のテレジーナ市訪問の企画を、一手に担当してくださった中山さんも、そんな日系移民の一人である。

中山さんとお会いして、移民についての色々なお話を伺う事は、今回のブラジル訪問の私の一番大きな楽しみであった。

中山さんは 15 歳の時に御両親と 2 人の御兄弟とともに移民されたそうである。

1954 年にサンパウロに来られたそうだ。お父様が養蚕業をされていたので、その技術指導で来られたらしい。

NHK ドラマから想像すると、御両親たちはさぞ御苦勞をされただろうと思っていたが、

中山さんのお話には、そういう悲惨な苦勞話は出て来なかった。

きっと養蚕事業もうまく軌道に乗っていたに違いない。またその背景には、それ以前の日系移民の人達が、筆舌に尽くしがたい苦勞で築き上げた、基盤のしっかりした日系人社会があったのだろうと思う。

今日において、ブラジルの日系人は高い地位の人が多く、知的職業分野で非常に活躍しているというのは公知の事実だそうだ。私も、「ブラジル移民は大変気の毒な人達だった」という思いがあったが、

どうやら大きな誤解であったようだ。

中山さんも、非常な努力と信念でご自分の未来を築いて来られて、今日の地位を築いてこられた一人である。

ブラジルの最難関の「サンパウロ大学」に3浪して、4回目にやっと合格されたのだそうだ。

やはり「ポルトガル語」が最大の障害だったらしい。

「ポルトガル語は厄介な言語でして、全ての名詞が男性、女性に分かれているんですよ。

それを覚えないとどうにもならないんです。」と、言葉の壁の厚さを語られた。

でも、大学で優秀な成績を収めて卒業された中山さんは、現在は州知事の特別補佐官をされている、言わばエリート公務員である。

「私は一匹狼です」「いつも武士道の精神で、何事にも取り組んでいます」と、事あるごとに言われる中山さんのピ背中はいつもピンとまっすぐに伸びている。

その背中には、日本人である誇り、ブラジルで成功した誇り、勇気、冒険心、

そして、過去100年に及ぶ日系移民の汗と涙と希望と夢が織り成すロマンを見る思いがした。



リザンドロ チト デ オリビエラ 小学校



献身的に教育に励む若い先生達



州政府より与えられた数々の賞

そもそも、今回のブラジル訪問のきっかけは、今春に小学校を退職された宮田先生から、「ブラジルのテレジーナ市にある小学校と、西合志第一小学校との交流調印に行きます」とのお話を聞いた事だった。

前回紹介した日系移民の中山氏と宮田先生は、去年の3月頃から

両校の交流の基礎作りを始められ、それが今回の私達の訪問と繋がったそうである。

どうしてこの両校が選ばれたかと言うと、まず日本側は、中山氏の母校であるという事だ。

異国に暮らす中山氏の故郷への思いは深く、「何か故郷のお役に立ちたい」という願いの込められたプロジェクトなのだろう。

ブラジル側の、リザンドロ チト デ オリビエラ小学校（舌をかみそう！）が選ばれた理由は、この小学校は昨年たくさんの賞を取った優秀な学校ということで、

日本の学校との交流にかける意気込みが感じられた。

それらの賞を紹介すると、

全国公立優秀学校賞

国語で、北東伯州都内公立学校で1位、(8年生)

数学で、北東伯州都内公立学校で1位、(8年生)

数学 国内で7位(8年生)

国語、 国内で9位(8年生)

ー 州内学生スポーツ大会賞

男子バレーボールで州内1位となり、国内学生スポーツ大会にピアウイ州代表として参加

ー 第5回州市町村対抗知識力大会賞 1位

ー テレジーナ市文化教育局主催優秀学校選賞 1位

と、輝かしい。

でもこれらの賞が、私にとってさらに輝きを増したのは、次のようなお話を伺った時であった。

学校訪問に先立ち、テレジーナ市文化教育局長を訪問する機会があり、市の教育事情について色々なお話を伺った時であった。

「リザンドロ チト デ オリビエラ小学校は最も貧しい地区にあります。ゴミ捨て場が多く、子供達は

親の手伝いで、ゴミ捨て場に行って物を拾ったりもしています。学校に来ない子供も多いんです。

そういう地区だからこそ、教育が必要だと思いました。それで、特に優秀な先生達を配置して力を注ぎ込んできました。

また、今回のこの交流事業に取り組んでいるのも、親や子供達に異文化に接する喜びを知ってもらい、

それを通して、子供たちが喜んで学校に来るように、また親も喜んで学校に行かせるようにしたいからなんです。」

「教育は物ではなく人である」というのは、やはり本当のようである。

ゴミ捨て場から悪臭が漂ってくるような環境にある学校でも、関係者の熱意と創意で見事な成果を挙げたのだった。

ブラジル&ペルーの旅

(4)

小学校訪問



未来に生きる子供達の笑顔は世界共通



ファッションショーを見せてくれた女の子達

今日はリザンドロ チト デ オリビエラ 小学校を訪問する日だ。

中山氏専属の運転手（州が雇っている）とも、毎日顔を合わせるので、もうすっかり打ち解けた感じだ。

「おはようございます！」とわざと日本語で挨拶をすると、はにかんだ表情で笑いながら、ポルトガル語

で

「ボン ジア」と返事が返ってくる。外国語を話すのが、気恥ずかしいのも世界共通のようである。

私のスクールに通う大人の生徒も、英語を話す事が恥ずかしくなるまでに、随分と時間がかかる人もけっ

こう多い。

学校に着くと、たくさんの生徒が集まり、校門から花道を作って拍手で迎えてくれた。

この小学校は、全生徒数が509名で1年生から8年生までのシステムになっている。

1年から4年までは6歳から14歳までで、授業時間は午後1時から5時まで。

5年から8年生までは10歳より17歳までで、午前7時から11時30分までだそう。

きちんと年齢別になっていないのも不思議だし、基本的に半日ベースなのには驚いてしまう。

前回にも書いたように、この小学校は最も貧しい地区にある。

子供達が、家の手伝いで終わってしまわないように、

また喜んで学校に来るように、この学校では5時以降のクラブ活動にも力を入れている。

これはブラジルでは、あまり一般的ではないそうだ。ここの先生達の教育熱が伺われる。

また、字が読めない大人達のための授業も放課後にやっており、60名の方達が識字教育を受けておられるそうだ。

歓迎会のブラスバンドの演奏では忘れられない事があった。

その中の一人の女の子が、曲が終わる度に、私を見て微笑むのだ。

よほど、日本人の私が珍しいのだろう。

私も負けずに精一杯の表情で答える。日本人の女の子なら、そこまで終わるところだろうが、

こちらは違う。歓迎会が終わってから、ちゃんと私のところに近づいてきて、話しかけるのである。

私が、ポルトガル語が出来ないとわかると、中山氏を通訳としてひっぱて来て、一生懸命に話すのであった。

お話の内容が、大人っぽいのに驚いた。

「あなたの笑顔は何にも増して美しい。私はあなたが大好きだ！」というような内容だった。

日本では、笑顔を誉められるなんてめったにない私は、12~3歳の子の成熟した態度に

戸惑ってしまった。



(5)

テレジーナ最後の日



ポルトガル領の時代を偲ばせる石畳



テレジーナの空はいつも抜けるように青い

今日も空は抜けるように青い。

外国に行くと何故か早起きが上手になる私は、今朝も朝食前の散歩に出かけた。

赤道近くに位置するテレジーナの朝は早い。まだ7時前なのに、子供達が駆け足で学校に向かって
いる。

家々では、早朝から庭の掃除に余念が無い。でも、掃除をしている人達は、家の持ち主ではなく、
雇い人なのだそうだ。

ブラジルでは中流以上になるとハウスキーパーを雇うのが普通で、庭仕事、洗濯、料理などの家事
全般は、毎日その人達がやってきてしてくれるそうだから、これもうらやましい話である。

貧富の格差がある社会の特徴とも言える。非難されるのを承知で言えば、

女性の社会進出もしやすい環境で、日本のように夫の再教育の必要性もなく、羨ましい限りだ。

散歩をしながら、こちらに着いてから受けてきた、日本に関しての様々な質問が思い出される。

●「こちらの学校を視察されてのご感想は？」

●「日本は教育に力を入れることによって、戦後の灰の状態から今日の繁栄を築いてきたと聞いています。

ブラジルの教育制度について何かアドバイスはありますか？」

●「教育の他に、戦後の急速な復興を可能にした要因は何ですか？」

● 「文盲率は？」

● 「大学の進学率は？」

●「日本の教育は、だんだんコストが高くなっているようで、それで、進学率が低くなる事はないのでしょうか？」

これらの質問に自分の答えた内容を反省してみると冷や汗物だが、その中で文盲率と進学率について答えた時の、相手側の反応が印象的であった。

「文盲率はほとんどゼロです」

これを聞いた時に、その質問をした男性は「オー」と感嘆の声をあげられた。

また「大学進学率は40%ぐらいです」と答えた時は、質問をした違う男性は驚いて、隣の人と顔を見合わせた。

彼らの驚きの背景には、低い大学進学率と高い文盲率があるのだろう。

朝食時間が迫り、足早にホテルに向かいながら、ふと

「世界がもし100人の村だったら」の次の箇所が思い出された。

し、誰かが私に興味深いお話を伝えてくれました

もし現在の人類統計比率をきちんと盛り込んで

全世界を100人の村に縮小するとどうなるでしょう

その村には…

70人は文字が読めません…

1人は（そうたった1人）は大学の教育を受け

そして1人だけがコンピューターを所有しています…

ブラジル&ペルーの旅

(6)

クスコ



かみそりの刃も通さないとされる、インカの石組



石段と石組はインカ時代の物

テレジーナ市での、一週間に渡った「さおり織り」ワークショップも無事に終え、全ての予定を終了した私達は今クスコにいる。ブラジルを出てリマに着いたのが、昨夜の午前12時過ぎ。そして、今朝は4:30に起床して6:30の飛行機に乗らなければいけなかった。乱気流を避けるために早朝フライトが多いペルーでは、

こういうハードなスケジュールも、けっこう普通らしい。

でも、不思議と疲れていない私は、飛行機から見えるアンデスの山々の美しさに我を忘れていた。

真っ白に雪をかぶった数々の峰は5000m級なので、飛行機のすぐ近くにあるような感じがしていた。

飛行場では、旅行社の車が待っていた。急いで歩いていたら、急に息苦しくなってきた。

そうなのだ、ここは3400mの高知にある都市なのだ。空気が薄いので、ゆっくりゆっくり歩かないといけなかったのだ。

車窓から見えるクスコの町は、朝焼けで赤紫色に染まっていて美しい。

インカとスペインの建物が混在し、古い重厚さが漂い、さすが世界遺産の街である。

ホテルで数時間休息を取ると、体も高地の空気の薄さに慣れてきたのか、さっそく街中を散歩したくなった。

街全体が世界遺産の建造物の間を歩き回り、時にはインカの石組みに触り、その精巧さに感動し、時には華やかな民族衣装を身にまとった女性に想像を膨らましながら散策した。

しばらく歩くと、「絵はいりませんか」と若者が声をかけてきた。自分で描いた絵だそうだ。あまり気に入らなかったのですが、断ったが、あきらめずに付いてきた。

「おひとりですか?」「観光ですか」とか、しつこく質問をしてくるので、

適当に答えていたが、そのうちにどことなく打ち解けてしまったから、おかしい。

結局、その少年には3時間ぐらい街をガイドしてもらい、おかげで、インカの人達の普通の家の中にも入れたし、台所も見れたし、古代インカの人々が神にささげたお酒「チチャ」も飲む事が出来た。

古代インカ人の生活を垣間見る事が出来たのは何よりも幸運だった。

リスクの裏はチャンスというのは、やはり真実のようだ。

ブラジル&ペルーの旅

(7)

マチュピチュ



霊峰に囲まれたマチュピチュ遺跡の全貌



美しい段々畑は聖なる畑でもあった

いよいよ今日はマチュピチュに行ける日だ。思えば、この日のために遠路はるばる日本からやって来たとも言える。

クスコから、またもや6:30という早朝の観光列車に乗らなければいけなかった。この列車は世界の観光客に超人気である。実際に乗ってみてその理由が分った。

5000m級の山々を見渡せる高台やのどかな田園地帯を走った後は、切り立つ溪谷の直下を走る。

途中から、水しぶきを上げて流れる清流ウルバンバ川の上を、滑るように走っている感覚に襲われたりもする。

絶景に息を呑みながらの 3 時間半は、睡眠不足と蓄積している疲労を回復するのにとても効果的だった。

列車を降りた後は、バスに乗り込んだ。ジグザグに折れている白い砂利道を、バスが猛スピードで走り抜けて行く。下は断崖絶壁！

手に汗を握るような思いをする事 30 分。着いた！天空の都市マチュピチュだ！

来た道の陰しさを思えば一転、別世界のような穏やかな平和な段々畑が眼前に広がる。石をびっしりと積み上げて作った家々や階段や神殿、そしてそれらを結んでいる石の道々。

20 世紀の初頭に発見されるまで、400 年もの間誰の目にも留まらずにひっそりと存在してきた秘密の都市だ。

朝からの雨も上がり、白い雲が悠々と周りの霊峰を横切って行く。

遺跡全体が見渡せる所まで、ゆっくり歩いて行った。ふと下を見渡して思わずこの言葉がこぼれた。

「美しい！」

私も世界の色々な場所に出かけて行ったが、外観とその存在意味の両方からしてこの言葉がピッタリの場所だ。

しばし目を瞑ってみる。

霊峰を伝わってくる音が漂っているようだ。

いまだ謎に満ちた空中都市で、歴史と一体になった瞬間のように感じた。

ブラジル&ペルーの旅

(8)

ペルーの首都 リマ



国家の守護神のお祭りでの、警察のマーチ



路上に作られた砂絵

私は大都市にはあまり興味が無いほうなのだが、今回は違った。

それは、ここペルーの首都リマに、是非とも会いたい男性が一人いらしたからである。

それは原さんという日本人で、ペルーに移住されて約40年という方である。

「日米井戸端会議」というメーリングリストで知り合いになった方で、他のメンバーからも「ぜひ原さんに会ってきてください」と頼まれたりもしていた。

ホテルのロビーでお会いした原さんは、小柄で優しい笑顔をされた柔和な方で、どことなく安心した。

「明日は、国家の守護神のサンタロサのお祭りがあるので、一緒に見に行きませんか？」

と御親切に誘ってくださった。

ピスコで数日前に起きた大地震のお話等をうかがって、一挙に現実世界に引き戻されたように感じた。

翌日になると、国家の守護神のお祭りだけあって、警察の行進があちこちで見られた。

「ペルーの警察は賄賂に弱いんですよ」と説明を受けて、貧しい国ではこれも共通しているようだ
と思った。

お昼は原さんの御自宅に招待いただいた。美しい白髪のお様とうら若い女性が、お昼の準備をされて
いた。

お様は日系 2 世だそうで、約 40 年前に日本に遊びにいかれた時に、原さんと出会われたらしい。

即結婚を決意されたそうで、壮大なロマンが秘められた、運命の出会いだったようだ。

一緒に食事の準備をしていたのは、お友達だろうと思って尋ねてみて驚いた。

日勤の家政婦さんなのだそうだ。ペルーでも、中流以上の家庭では、日勤の家政婦を雇うのは普通
だそうだ。

お様は、ただひたすら美容師の仕事を励みさえすれば良いとの事で、また羨ましい限りだった。

さあ、明日は仕事と家事と夫の待つ日本へ帰る事にしよう！

ここ数年、良質の家庭教育を施してきた我が夫は、暖かい味噌汁と炊き立ての御飯を用意して待つ
ててくれるだろうか？

終わり